

氷の島

地球温暖化の影響で北極や南極の氷が溶けだしています。氷がどんどん小さくなってくると、氷の上で暮らしている動物たちはどうなってしまうのでしょうか？

「氷の島」は、ロープの輪を氷の島に見立てたあそびです。子どもたちが入ったロープの輪を少しずつ小さくしていくと、子どもたちは普通に立ってはいられません。さあ、どうすればよいのでしょうか？「全員が協力しないと輪に入れなくて大変だ！」友だちどうしはもちろん、私たちの暮らすこの社会も協力していくことがとても大切です。このあそびを通して、お互いに協力することの大切さを考えてみましょう。

◎ 準備

- ・室内でも園庭でもできます。
 - ・子どもたちは10～20人のグループにします。
- 準備物：10m程度のロープ（ひも）



◎ あそびかた

- 1) ロープを直径3m程度の輪にして地面に置き、この輪を氷の島に例えます。
- 2) この島の中に子どもたちが入ります。
- 3) 「最近地球が暖かくなってきて氷が溶け始めてきた」という話をします。
- 4) 「このため、氷の島も小さくなってきました」と言って輪を少し小さくします。
- 5) クラスのみんなで協力して小さくなった島に入ります。
- 6) 島が小さくなるたびに、子どもたちは中に入れるよう協力し合います。

◎ ふりかえり

- ・小さくなった島に入る時、どんな工夫や協力が必要となったかを思い出しましょう。
- ・実際に地球が暖かくなってきて、氷が溶けてきている話をしてもよいでしょう。

◎ 発展・応用

- ・ホッキョクグマやペンギンなどの生き物による表現あそびとして取り組んでもよいでしょう。
- ・あそびの前か後に地球全体の話をすることで、「地球」をイメージさせることもよいでしょう。

◎ 留意点

輪が小さくなら、子どもに危険がないように注意します。輪は無理に小さくせず、ようやく入れるくらいがよいでしょう。

このあそびの対象

環境教育の視点

友だち



協調



ねらい

- 協力することの大切さを感じる。
- クラス内で協力して目的を達成する楽しさを感じる。

年齢

5歳

季節

春・夏・秋・冬

場所

室内・園庭・公園

関連するあそび

バランスあるき………P.53

実施例

年齢 3歳児 人数 15人 季節 夏 場所 園庭

実施内容

◆導入

「自分たちの島」がイメージできるように、1人1つフラフープを用意して、地面に置きその中に入りながら島と島を移動する遊びを楽しんだ。

◆当日の活動、子どもたちの様子

島と島を移動する遊びを何度か繰り返す中で、1つのフラフープに2人、3人一緒に入ろうとする子も出てきて、自然とみんなで入れるように抱き合う姿も見られる。中には、「もう入れないよー」と言ってフラフープから抜けさせようとする姿も見られた。そこで次に、保育者が、子どもたち全員入ることができるような大きな輪を地面に描く。「今度はみんなが一緒に氷の島に入ったよ。でもね、こんなに暑い日が続くと、氷の島がどんどん溶けちゃうんだって!」と言って、少しずつ小さな輪に変えていく。

子どもたちは、「えー!」と言いながらも、みんなで身を寄せ合って上手に輪の中にとどまっている。フラフープでは押し合っていた子たちも不思議と、「みんなで入れるように」という思いで同じ島にとどまることができていた。

◆ふりかえり

大きな輪の中にクラスみんなで入ることで、自然と一体感を感じられた様子であった。地球温暖化というところの理解までは難しかったが、「友だちと協力する」という心地よさを感じることはできたと思う。



コラム 地球温暖化の影響

川崎市内の年平均気温は、1985年から2020年までの36年間で、川崎区内の測定地点で約1.7℃、中原区内の測定地点で約1.9℃、麻生区内の測定地点で約1.9℃上昇しています。また、川崎市内の猛暑日（日最高気温が35℃以上の日）についても、この10年間で3倍に増加しており、市内でも地球温暖化の影響が生じ始めています。

(出典：川崎市気候変動レポート)

－このままでは2050年には 川崎市が水没!?－

アメリカの研究機関が発表した研究データでは、このまま気温が上昇すると、2050年頃には全国の沿岸地域他、川崎市臨海部のかなりの部分が水没してしまうということが報告されています。

(出典：川崎市地球温暖化対策推進基本計画)



出典：アメリカ研究機関「クライメート・セントラル」ウェブサイトより川崎市作成

バランスあるき

私たちは、家族や友だちどうしはもちろんのこと、広く世界中の人ともつながり、助け合い、支え合って生活しています。子どもたちは、日常の保育の中で協力し合うことを学んでいます。この「バランスあるき」も、友だちと協力し合いながらすすめる簡単なリレーあそびです。子どもたちはこのあそびを通して、お互いに助け合い協力し合うことが必要であり、それが楽しいことだときっとわかるでしょう。このあそびによって、協力することの大切さとともに、私たちの生活は広いつながりに支えられていることを伝えるきっかけとしましょう。

◎準備

- ・室内、園庭、公園など10m四方程度の広さがあればよいでしょう。
- ・数mの直線コースをグループの数だけ設定します。コースの長さは子どもの人数によって変えます。
- ・子どもたちを4～6人程度で2グループ以上に分けます。グループの人数は同じにします。

準備物：頭の上にのせる本など、コース設定用のひもやコーン

◎あそびかた

- 1) 10m程度の直線コースをグループ分設定します。
- 2) 各グループとも頭の上に本を乗せた子どもがコース上を競争して歩きます。
- 3) 頭の上から本が落ちたらその子どもは動けなくなります。同じグループの子どもが拾って頭の上にのせたら再び歩きます。
- 4) ゴール地点まで到着したら別の子どものに交代して逆方向に進みます。どのグループが早く全員終わることができるかを競います。

◎ふりかえり

- ・グループの友だちが支えてくれなかったら、このあそびが成立したでしょうか？
- ・協力することはクラス内だけでなく、幼稚園内でも、お家でも、生活の上でも大切だという話をします。

◎発展・応用

慣れたらコースを直線だけでなく、曲線や曲がり角、起伏などを設定すると楽しめるでしょう。

◎留意点

- ・頭に乗せるのは本に限らず、壊れないもの、やわらかいもの、自然物など、さわってケガをしないものであれば何でもよいでしょう。
- ・このあそびでは、早さを競うことよりも協力して行うことが大切です。

このあそびの対象

環境教育の視点

友だち



協調



ねらい

- ・つながり協力することの大切さを感じる。
- ・人は協力し合って、支え合って生活していることに気づく。

年齢

5歳

季節

春・夏・秋・冬

場所

室内・園庭・公園

関連するあそび

氷の島……………P.51

実施例

年齢	5歳児	人数	24人	季節	—	場所	園庭
----	-----	----	-----	----	---	----	----

実施内容

◆当日の活動・子どもたちの様子

2人1組のペアで行う。(お玉でボールを運ぶ人、サポートする人) スタートからゴールまで、お玉にボールを乗せて運ぶ。途中でボールを落としてしまったら、その場でとまり、サポートする人に拾ってもらう。

お玉でボールを運んでいる子も、ボールを落としてしまうと自分で拾おうとするが、相手チームの友だちから「止まって待つんだよ」と声をかけられることで待てるようになった。

1回戦目、ペアの子は併走せずに、ボールが落ちると慌ててスタート地点から走って行ってボールを乗せる子が多かった。2回戦目は、ボールを運ぶ子のそばで見守りながらついていくペアを真似て、多くが併走してゲームを進めていた。

◆ふりかえり

2回戦目を終えて、みんなで輪になって話し合い、感想や感じたことを出し合う。「2人で力を合わせると早く進める」「相手のことを思うと、一緒に走った方がいい」との声もあがった。ゲームの中でも相手のことをよく見て(観察) 気を配ることが自然とできている子が増えていた。協力する姿が見られ、保育者が声をかけなくても周囲の子の様子を見て気づくことができたり、ゲームだけでなく生活や集団としての色々な場面で協力することの大切さに気づき、年長児として育つ姿につなげることができた。



年齢	5歳児	人数	24人	季節	—	場所	室内
----	-----	----	-----	----	---	----	----

実施内容

◆導入

頭の上に物を置く、乗せるということを今までやったことがなかったので、まずは10cm四方の積み木を乗せてみた。「乗せた状態でストップしていいね」と伝えたが、乗せられない子が何人もいた。次に、好きなものを乗せてみる。毛糸などのように軽く、素材で落としにくいものを選んだ子もいた。

◆当日の活動・子どもたちの様子

頭に乗せることをやってみてから、リレーをした。3人1組で、1人は頭の上に本を乗せ、2人はそれが落ちたら拾い、また乗せるというルールを確認した。1度目は、頭の上のものが落ちないように手で押さえてしまう姿も見られた。チームで作戦会議をし、2度目は頭に乗せやすい本を選び乗せることにした。

◆ふりかえり

どんなものが乗せやすいのか(つるつる、ざらざら、薄い、厚い、軽い、重い、柔らかい) どうすれば落ちないのか(姿勢、何を乗せるか、静かに歩く、応援も静かにする) 落とした時どうしたらいいか(拾って乗せる子が素早く動く) など、やってみて感じた意見が出された。先日運動会でリレーをして、みんなで協力して頑張ることを経験している子どもたち。今回も協力し合いながら楽しむことが経験でき、1人だけ頑張ってもうまくいかないことも感じられたと思う。もう少し、人と協力したり支え合うことについて話すことができればよかった。



年齢	3歳児	人数	16人	季節	—	場所	園庭
----	-----	----	-----	----	---	----	----

実施内容

◆導入

室内外の集団ゲームで、簡単なルールのあるリレーゲームを楽しんできた。

◆当日の活動、子どもたちの様子

【1回目】

「おたすけゲーム」と名付け、園庭に誘う。6m程度の直線コースを4グループ設定して、折り返しのカラーコーンを置く。保育者が見本となり、遊び方とルールを知らせる。

1回目は、グループの子全員が拾いに行き、助けるルールにした。頭の上からカラーコーンが落ちたら、その子は動けなくなる。同じグループの子どもたちが拾ってのせ直したら再び歩き、ゴール地点まで到着したら、次の子に交代する。

【2回目】

1回目の翌日に行う。「おたすけゲーム」と聞いてすぐに理解し、スタート地点に集まる。2回目は、二人組になってペアになった子がそばについて歩き、頭の上からカラーコーンが落ちたら、その子は動けなくなるので、落ちたらすぐにペアの子どもが拾ってのせ直してあげる、というルールにした。折り返し地点で役割を交代する。ゴール地点まで到着したら、次のペアに交代する。

◆ふりかえり

子どもたちに感想を聞くと、「お友だちが助けてくれて、うれしかった。」「優しかった。」という子が多く、助け合いの気持ちや協力し合うことの大切さを感じることができ、友だち関係が深まった。



みんなで作家

子どもの持つ想像する力は、大人の私たちでは思いもよらず、しなやかで夢のある力です。「みんなで作家」は、1枚の写真から想像力を働かせてみんなで協力し合いながら物語をつくるあそびです。1枚の写真をきっかけに、身近な自然への思いをめぐらせてみましょう。また、このあそびでは、人の話を聞く力、自分の考えをしっかりと伝える力が必要となります。

このあそびの対象

環境教育の視点

生き物・
友だち



ねらい

- 生き物の気持ちを想像する。
- 他の人の話をよく聞き、自分の考えをしっかりと伝える力を持つ。

年齢

5歳

季節

春・夏・秋・冬

場所

室内・園庭・公園

◎準備

お部屋でも、天気の良い日は園庭や公園でもできます。内容は屋内向きですが屋外のほうがイメージしやすいかもしれません。

準備物：生き物の写真

◎あそびかた

- 1) 生き物の気持ちがあらわれている絵本を読み、生き物が何を考えているかを問いかけながら想像する練習をします。
- 2) クラス全員に生き物が写っている1枚の写真を見せます。
- 3) そこに写っている生き物が何をしているか想像します。
- 4) 想像した内容を発表していきます。
- 5) 子ども1人1人の発表をもとに、全員で意見を出し合って生き物の物語をつくりあげます。

◎ふりかえり

- みんなでつくった物語をもう一度ふりかえってみましょう。
- 本物の生き物はどのような所（生息環境）で暮らしているのか考えてみましょう。

◎発展・応用

- 園庭で生き物を見つけたら、その生き物が何を感じているのか、どうしてそう感じているのか考えてみましょう。
- 慣れてきたら、写真でなくても、実物の生き物を見ながら物語をつくってもよいでしょう。

◎留意点

- 物語に出てくる生き物の生態や生息環境が、実態とかけ離れないように注意しましょう。
- 先生は、子どもたちが他の子どもの意見を尊重し、意見の言いやすい場づくりを心がけましょう。

年齢	4歳児	人数	21人	季節	—	場所	室内
----	-----	----	-----	----	---	----	----

実施内容

◆当日の活動、子どもたちの様子

朝の会で昆虫（バッタ）の紙芝居を読んだあとに、バッタと猫が写った写真を子どもたちに見せ「これはなんでしょう？」と聞くと、「バッタ！」「猫！」という声が続々と出てきた。「じゃあこのバッタは何してる？」「どんなことを思ってると思う？」と聞いてみると、またすぐに話し出そうとしたので、順番に当てて意見を言うてもらおうようにした。

最後に、子どもたちの意見をまとめてひとつのお話しにして振り返った。

◆ふりかえり

バッタの猫に対する想いが大半であったが、猫の気持ちも想像してみるのも面白いかもしれない。子どもたちの好きな昆虫を題材にして、想像しやすい写真にしたので、子どもたちの意見も出やすかった。「もっとやりたい！」という声もあったので、時々こういう活動を入れてみようと思った。

